法陀利華

第379号（令和２年４月３日㈮発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

世に出興するゆゑは、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。
（『仏説無量寿経』）

生きるための智慧

宗教部長　普賢保之

いよいよ新年度のスタートです。今年に入ってから新型コロナウイルスの流行が人々を不安に陥れています。この原稿を書いている二月末時点では中国、日本だけでなく韓国、イタリアでも急速に感染が広がっていると報じられています。マスクの需要が高まり中々手に入れにくい状況になっています。京都市内でも特定の国民を排除せよ、といったビラが電柱に貼られていたとの報道もありました。不安な心理状態がもたらす行動なのでしょう。パニックとは言わないまでも過剰な反応です。

阪神淡路大震災

平成七年（一九九五）一月十七日の早朝に阪神淡路大震災が発生しました。すでに発生から二十五年が過ぎました。京都市内も激しく揺れました。当日は小学生の娘と二人で寝ていました。私は前日まで寺の法要があり疲れて熟睡していました。揺れたことは覚えていますが夢現の状態でした。私は睡魔に襲われ再度寝ようとしたのですが、娘が怯えている様子を見て、ただ事ではないと思いテレビをつけ台所に行ってみました。すると食器が棚から落ちて散乱していました。テレビのニュースでも深刻な状況が次々に伝えられていました。

この震災時のことでよく覚えているのがデマです。日頃からお付き合いのあった近所の方が「今晩、亀岡を震源とする大きな地震が発生するから、車の中に避難した方が良い」とわざわざ知らせに来てくれました。この方の行為は悪意ではありません。むしろ善意からの行動でした。しかし、この方の取った行動は、自らの不安から出た行動であり、人々を混乱に巻き込みかねない行動でもありました。避難した方もいたようですが、わが家は誰も車に避難しませんでした。冷静に考えれば、地震の発生がそこまで特定できるのであれば、一月十七日の地震も予知できたはずです。人間、不安になると根拠のない情報に振り回されてしまうのです。

講演会での話

以前、あるところで「阿弥陀仏の救い」というタイトルで話す機会がありました。仏教の最終目標は「さとり」を開くことですが、浄土教の教えでは「さとり」は死後で語ります。それでは生きている間、仏教は私たちとは関係がないのかといえばそうではありません。親鸞聖人は生きている間の「さとり」を説いています。今の「救い」と、死後の「さとり」を説いています。今の「救い」があるからこそ死後の「さとり」もあるのです。今の「救い」なしに死後の「さとり」もありません。

ではどのような状態を「救い」というのでしょうか。「安心感」と言い換えても良いと思います。それでは本当の「安心感」は、どのようにしたら手に入れることができるのでしょうか。たとえば夜、知らない場所に連れて行かれ、真っ暗闇な状況に放置されれば、誰でも不安になります。竦んでしまうでしょう。ところが、一条の光が差すとほっとします。それは周囲の状況が把握できるからです。自分の立ち位置は、真っ暗闇の状態の時と光が差し込んで来た時と全く変わりません。ところが光が差し込んだだけで不安が安心に変わるのです。同じことは私たち自身についても言えることです。

自分のことは自分が一番よく分かっていると思っている人も多いでしょう。はたしてそうでしょうか。自分のことを一番分かっていないのは自分自身かも知れません。無意識に見ようとしていないのかも知れません。なぜなら自分の恐ろしい部分を認めたくないからです。

私たちのもつ闇

親鸞聖人が八十五歳の時に書かれた『一念多念文意』という書物の中に、「凡夫」といふは、無明煩悩われらが身に満ちみちて欲も多く怒り、腹立ち、嫉み妬む心多くひまなくして臨終の一念に至るまでとどまらず消えずたえず。とあります。「凡夫」とは自己中心的な心、つまり煩悩を抱えた私たちのことです。私たちは自己中心的な心にまみれているというのです。自己中心的な心の具体的な姿とは、まずあれも欲しい、これも欲しいという心です。そしてその欲望が叶えられないと、私たちの心には怒りが炎のように燃え上がります。それだけではありません。友達の成功に対しても嫉妬の心をおこします。親友であっても、むしろ親友だからこそ、その成功を素直に喜べないことだってあります。逆に親友に対して優越感を覚えることもあります。入学試験の時にそれを経験した人もいるでしょう。今後、就職活動で経験する人もいることでしょう。私たちは日々こうしたことを繰り返しています。それが私たちの「ありのままの姿」だというのです。親鸞聖人のこの言葉は、阿弥陀仏の教えという鏡を通して見えてきた聖人自身の姿でもあります。このような心を私たちはコントロールできません。コントロールできないばかりかこのような心に振り回されています。だから苦しいのです。安心感を持てず苦しむのです。これでは前に進む力は出てきません。逆に自分の「ありのままの姿」を知ることによって、私たちは安心できるのです。人間は安心できれば前に進む力も湧いてくるのです。

ウイルスの正体

このような話を多くの人を前に話しました。講演を終えた後に一人の男性が私の所にやって来ました。差し出された名刺には、「日本大学教授清水一史」（現在は神戸大学）とありました。先生の研究対象はウイルスでした。先生は私の話を聞いて、ウイルスについても同じことが言えると思ったそうです。ウイルスの正体がはっきりしさえすれば恐れることはないというのです。正体が分からないから恐いのであり、分かれば対応の仕方も分かるから恐くはない、と仰いました。

このような例からも分かるように、「ありのままの自分を知ること」は生きる上でとても大切なことなのです。生きていく上でさまざまな苦しみが私たちを待ち受けています。その苦しみをなくすことはできませんが、「ありのままの自分を知ること」によって、その苦しみを乗り越えていくことはできるのです。だからこそ、本学は親鸞聖人の説く阿弥陀仏の教えを建学の精神としているのです。

学生時代をどのように過ごすかによって、今後の人生が大きく変わるといっても過言ではありません。

大学若手職員からのメッセージ

①「やる」という感覚で、今を生きる

スポーツを通じて、躰と心、感情も感覚を見つめると、同じ状態、良い時も悪い時もずっと続くことはなく、瞬間で変わる。

あらゆるものすべて、変わり移ろいゆくと解る。

現実は、自分自身の意識が作ったもの。「変わらない」と思うなら、それは、そう信じている・思い込んでいる自分がいるだけ。

どんなことでも「難しい、できない」、「特別なこと」と感じてしまうと、余計なことに意識が向いて、力みになり、こだわりになる。

また、最近では「合理的じゃない、無駄なこと、どうせ無理」という言葉をよく耳にする。無駄なこと、中途半端だとは自分の思い込み。失敗や挫折を遠回りに感じるかもしれないが、その道を歩んでこそ、見えること・分かることがあるし、何もしなければ、半端にすらならない。ただ、「失敗を前提に行動しよう」という意味ではない。

やれることを少しずつ積み重ね、過去でも未来でもない、今の自分と、今やれることに意識を集中させる。そして、「変わりたい」「～をしなければ」「～でありたい」というこだわりも捨てる。

「やってみる」ではなく、「やる」と決め、動く。

何事も「やってみる」の意識は大事だが、「頑張ってはいる、考えてはいる、やってはいる」になるし、「まずは考える、合理的か否か、やる時間がない」にもなる。やがて、結果が伴わない現実から逃げ、自己否定し、他人への嫉妬や優越、承認欲求を募らせ、他人との比較競争をしがちになり、常に何かに振り回されてしまう。

一方で、「やる」意識は、「正しいか、難しいか、出来るか否か、無駄なことか否か」という余計な先入観、己の価値基準を捨て、一喜一憂や執着もせず、他人との比較・競争、こだわりもない。自分自身だけを見つめ、ただ目の前のことに挑み、その瞬間に生きる、一行三昧の姿勢。

過去でも未来でもない、今、この瞬間が、自分自身。

今を生きると、過去の見え方と未来の方向性が変わる。

目の前のことをやる、この瞬間をしっかりと味わって生きると、生きる意味ではなく、生きている実感をしっかりと味わえる。それだけで十分幸せだ。

（情報システムセンター　遠藤　悠亮）

令和２年４月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当
15	水	1	養音1	藤井
		3	国文3A・3B	小池・普賢
16	木	1	現社3C・3D	内田・普賢
		4	現社3A・3B	黒田・藤井
17	金	1	食物1A・1B	塚本・井上
		2	心音3	秋本
		4	現社1C	佐々木
20	月	1	現社1A・1B	中西・西
		2	史学1A	西
		3	国文1A	普賢
		4	児童1	黒田
21	火	1	心理1	黒田
		3	造形3	赤井
		4	英文3A・3B	森田・清基
22	水	1	法学3	西
		2	福祉3	小池
24	金	1	英文1A・1B	秋本・野村
		2	教育1	井上
		3	児童3	佐々木
		4	現社1D	安田
27	月	1	造形1A・1B	井上・上野
		2	食物3	普賢
		3	国文1B	西
		4	史学3A・3B	塚本・野村
28	火	1	教育3	貫名

令和２年５月 月例礼拝日程表

日	曜日	講時	対象学生	担当
7	木	1	現社3C・3D	内田・普賢
		4	現社3A・3B	黒田・藤井
8	金	1	食物1A・1B	塚本・井上
		2	心音3	秋本
		4	現社1C	佐々木
11	月	1	現社1A・1B	中西・西
		2	史学1B	上野
		3	国文1A	普賢
		4	児童1	黒田
12	火	1	法学1A・1B	西・赤井
		3	造形3	赤井
		4	英文3A・3B	森田・清基
13	水	1	養音1	藤井
		2	福祉3	小池

◇1回生…京女百年史ビデオ
※史学1B、法学1A・1Bの月例礼拝は5、6、7月に行います。

澪標

本学が建学の精神としているのは、親鸞聖人が生きる拠り所とされた阿弥陀仏の教えです。聖人は老・病・死など様々な苦しみを乗り越える道を求め、最終的に阿弥陀仏の教えに辿り着いたのです。その出発点になったのは九歳の時でした。

聖人は九歳の時に、京都白川の青蓮院で得度され比叡山に登られました。得度式に臨まれた時に「明日ありと思う心のあだ桜、夜半に嵐の吹かぬものかは」という歌を詠まれたと伝えられています。「まだ明日があると思っていると、夜嵐が吹けば、はかなく散る桜のように、私も心変わりしてしまうかも知れない」と言って、得度式に臨まれたというのです。私たちは大事なことでも先伸ばしにしてしまいがちです。しかし、私たちの命は何時絶えるか分かりません。

学生の皆さんには、若いときにやっておかなければならないことが沢山あります。その一つが自分と真摯に向き合うことです。それは今後待ち受けている困難を乗り越えていくためでもあります。自分と向き合ったからといって、答えなど出ないという人もいますが、果たしてそうでしょうか。

親鸞聖人が愚直なまでに自身と向き合われたのは、老・病・死といった苦を乗り越えるためでした。順風満帆な人生などあり得ません。人は必ず躓きます。欲望を満たすことばかりに目を向けていたのでは、苦をを増幅するばかりで乗り越えていくことはできません。聖人は幼い頃から生きるということを真剣に考えた人だったのです。（普）

見えるものと見えないもの

仏教学非常勤講師　野村淳爾

パン屋とガラス屋

先日、読んでいた本の中に印象的だった物語がありました。それはヘンリー・ハズリットの『世界一シンプルな経済学』で紹介されていたものです。長い文章なので、内容をまとめて述べます。

「あるパン屋が悪童によって窓ガラスを割られてしまう。すると、近所の人たちは口々に〈窓を割られたのは不運だったが、悪いことばかりでもない。たとえば、そら、ガラス屋が仕事にありつけるじゃないか〉といい、そこから〈新しいガラスはいくらぐらいするだろうか。二五〇ドルといったところだろう〉〈そもそもガラスが全然割れなかったら、ガラス屋はやってはいけない〉と話は展開する。この筋書きの論理的な結論を導き出すと、こうなる。ガラスを割った悪童は、町に損害を与えるどころか、利益をもたらしたのだ。」

この筋書きがもたらす結論は、本当に正しいのでしょうか。たしかに窓ガラスが割れたことによって新たな雇用が発生しているという点だけをみれば、正しいと言えます。しかし、これは物語の一側面を表しているにすぎません。

第三の当事者

実は、物語には続きが書かれていました。

「パン屋の主人は、その二五〇ドルで新しい礼服を仕立てるつもりだった。（中略）パン屋の主人は、窓ガラスと二五〇ドルの両方を持っていたのに、いまや窓ガラスしかないことになった。（中略）パン屋の主人を地域共同体の一員と考えれば、この共同体は仕立てられるはずだった礼服を失い、貧しくなったことになる。」（『同』）

つまり、パン屋の二五〇ドルの取引が仕立て屋からガラス屋に転換しただけであって、新たな「雇用」はどこにも発生していないということです。近所の人たちは、現場の当事者であるパン屋とガラス屋という「見えるもの」だけで判断して、仕立て屋という第三の当事者、「見えないもの」がいる可能性を考慮しなかったのです。

この後半の筋書きから、ハズリットは物語の結論として、「人は、直接目に映るものしか見ないのである」と指摘しています。

ここでいう「目に映るものしか見ない」ということは、目の前の事象だけでものごとを判断しがちである私たちの有り様を示していると思います。

この指摘は当たり前のことではあるけれども、意識しないと見過ごしてしまう、重要な視点です。もしかして、第三の当事者だけなく、第四、第五の当事者がいたことも考えられます。「見えるもの」だけで問題をとらえると、「見えないもの」に思いを寄せづらくなることを意味しているのでしょう。

「○○問題」

前半で示したような筋書きと同様に、「見えるもの」だけで判断してしまっていることは日常生活に多くあるのではないでしょうか。

たとえば、私たちの社会では、何かの案件や悩みなどを取りあげるとき、「○○問題」などと名前をつけて理解する傾向にあります。そのメリットは、一言でいえば、可視化できるということに尽きます。「○○問題」と示せば、その案件の概要を一瞬で把握できるということです。

しかし、デメリットもあります。それは先入観というフィルターを通してその問題を見てしまうことです。「○○問題」と示せば、その概要が把握できる反面、その言葉のもつイメージ、もしくは自分の経験則だけで、問題をみてしまうのです。

「貧困問題」と言った場合、どのような問題を想像するでしょうか。

特にここ数年日本では、「子どもの貧困」が話題になっています。一般的には、「貧困」という言葉は、金銭的問題から「住むところがない」「その日食べるものがない」「服がボロボロ」という、いわゆる「ストリートチルドレン」のイメージを抱かせてしまうと聞いたことがあります。この捉え方は世界的視点でいえば、間違いではありません。現状、日々「命の危険」に晒されている子どもたちは全世界に多くいます。

ところが、日本で問題にする「貧困」は、ある一定の生活水準と比べて苦しい状況にあることをいいます。ここにはもちろん経済的困窮が第一義としてあります。しかしながら、この「貧困」の何が問題視されるのか、その本質を探ると、学力や自己肯定感の低下、または人間関係の劣化など、社会システムからの排除・孤立という問題が浮き彫りとなります。貧困によって社会システムから追い出される「社会的排除」の状況を問題にしています。

「見えない」他者へのまなざし

「貧困」という「見える」言葉に引きずられて、その問題の本質を見失ってしまうように、「見えるもの」だけで判断してしまうと、「見えないもの」にまで思いを馳せることができないことがしばしばあります。

冒頭の物語の「見えない」第三者の存在に思いをいたすように、社会では他者へのまなざしが求められています。しかし、「見えるもの」だけで判断してしまうことは、すべての事象を自分中心にとらえ、自己の延長線上において語るため、限定的な他者へのまなざしでしかありません。

「見えるもの」による先入観を排除して、「見えないもの」の存在をどこまで考えられるかが大事なのでしょう。普段の生活で意識しないところにまで意識をはたらかすことを心がければ、「見えない」他者へのまなざしを涵養することができるのではないでしょうか。

法のことば

世に出興するゆゑは、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。

（『仏説無量寿経』）

仏教にはたくさんの経典があります。「仏のさとりを開く」という最終目標はすべて同じ。しかし、そこに到達するための方法は経典によって千差万別です。では、どの経典が最高なのか。古来、多くの仏教者たちがこの問題に取り組み、それぞれに最高の経典を見出してゆきました。

『仏説無量寿経』という経典では、冒頭で釈尊が「私はこの教えを説くためにこの世界にあらわれた（世に出興した）のである」と高らかに宣言します。親鸞聖人はこの釈尊の宣言を根拠として、『仏説無量寿経』こそが最高の経典であることを明らかにしました。そして、そこに説かれる、「南無阿弥陀仏」によってすべての者が仏のさとりを開くことができるという教えを、「浄土真宗」と名付けられたのです。

（西　義人）

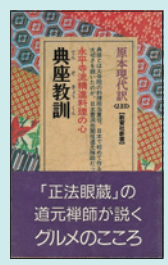
シリーズ　智慧の蔵㉙

典座教訓―永平寺流精進料理の心（教育社新書―原本現代訳）

道元（著）・佐藤 達全（翻訳）　教育社　一九八八年

本書は道元禅師（1200-1253）の著作『典座教訓』と『赴粥飯法』の現代語訳である。それぞれの原文と書き下し文、和訳とが記されている。また、比較的平易な訳語が使用されており、専門家以外の読者でも気軽に読める設計である。道元は親鸞聖人と同じ鎌倉時代を生きた。曹洞宗をひらき、永平寺を修行道場とし、そこでの生活の全てを修行と捉えた。とりわけ食事を重視し、食事番を「典座」といい、高い地位を与えた。『典座教訓』は、1236年、道元37歳の時の作である。一方『赴粥飯法』は、1246年頃の作と推定される。前者は典座の料理係としての作法や心構え、献立の立て方、米のとぎ方、野菜の扱い方、調理と味付方法まで詳しく定められている。その味は、苦・酸・甘・辛・鹹（塩からい）・淡の「六味調和」し、「軽軟浄潔」軽く軟らかで浄らかでサッパリと「如法作」法（理）にかなって丁寧に調理されるべきだという。後者は、禅院における食事作法について順を追って示されており、食事の根本的意義が述べられている。『典座教訓』には、「心」についての言及が多い。特に巻末に「喜心」「老心」「大心」の三心を説く。喜心とは、典座の仕事をする時に喜びの心をもって行なうこと。「老心」は、調理をする場合に、食材や道具でも、すべて親が子を養うときのような、慈しみ深い心を持つこと。大心とは、一方に偏ることのない心で「喜心」と「老心」を基盤にしつつも、これらの二心を大きく包みこむことである。心を込めた調理とは、調達した食材は、自分の眼のように大切に取り扱うこと。良い材料がないといって手抜きしたり、良い材料だからと張り切ったりしてはいけない。たとえ道端の草でも、工夫をこらして、心を込めて調理しなくてはいけない。いただく側も、高級だ、粗末だと選り好みしてはいけない。くれぐれも気をつけるべきは、物によって心を変えてはいけない。相手の身分によって高慢になったり、へつらったりしてはいけない。つまり差別をしない。作る人と食べる人の関係も重要である。典座は、心を込めて作った食事を提供し、食べる側の修行僧は典座の心に感謝して食べる。現代人が、食事に対して忘れていることを思い出させてくれる一書である。

（井上　博文）



お知らせ

✻　花まつり（灌仏会）　✻

４月８日は仏教の開祖、釈尊（ゴータマ・シッダルタ）のお誕生日です。その日を「花まつり」（灌仏会）としてお祝いします。みなさんも一緒にお祝いしませんか？　お祝いに宗教部オリジナル栞を差し上げます。

日　時　令和２年４月８日（水）
※日程が変更となった場合は、京女ポータルにてお知らせします。
９：00～16：30

場　所　Ａ校舎正面玄関前